

## 橋本昌己(はしもと まさつぐ)画伯 ご紹介

1933年 函館市にお生まれになり、1955年 沼津市に移住されました。

生涯を通じてシルクスクリーン版画を制作し、県内外の展覧会で高い評価を受けられました。

### 橋本昌己プロフィール

- 1933年 函館市に生まれる
- 1955年 沼津市に移住
- 1972年 岩中徳次郎氏に本格的に師事する
- 1973年 第42回朔日会 準会員推挙
- 1974年 第43回朔日会 奨励賞会員推挙
- 1983年 **沼津市芸術祭出品作品沼津市買上**
- 1986年 東京展出品 以後毎年出品
- 1987年 静岡県美術家連盟展 会員賞受賞  
静岡県芸術祭 奨励賞受賞
- 1988年 静岡県芸術祭 準奨励賞受賞
- 1989年 天竜市玖延禅寺に洋画家清川泰次氏寄進の共同納骨堂内の壁画制作に参加  
静岡県芸術祭 中日・東京新聞社賞受賞  
静岡県芸術祭 奨励賞受賞
- 1990年 **第16回 日仏現代美術展** 作品が海を渡る
- 1993年 静岡県版画協会展に版画制作出品 奨励賞受賞
- 1994年 静岡県版画協会展 静岡県文化協会長賞受賞
- 1996年 静岡県版画協会展 静岡県知事賞受賞
- 1998年 清水市民文化会館主催県内作家シリーズ  
橋本昌己版画展
- 1999年 東京展会員退会
- 2000年 御前崎町(現御前崎市)清川泰次芸術館にて 清川泰次推薦作家展 橋本昌己自選展

## 1. 橋本さんの版画制作手法の特徴



### ① シルクスクリーン(セリグラフ)を中心とした技法

シルクスクリーン版画を主要な表現手段として用いられ、色面を重ねることで、鮮やかで透明感のある画面を作り出すのが特徴です。

### ② 多層の色を重ねる緻密なプロセス

1色につき1版を作るため、数十版に及ぶこともあると言われています。

色の重なりによる微妙なニュアンスを大切にされており、「単純な色面に見えて、実は複雑なレイヤー構造」という作品が多いです。

### ③ 幾何学的構成と精密な計算

直線・曲線・円・矩形などの幾何学形態を組み合わせた構成が特徴的です。

版の位置合わせ(見当合わせ)も非常に精密で、わずかなズレも許さない緻密な制作姿勢が知られています。

### ④ 色彩の透明感とグラデーション

シルクスクリーンのインクを薄く調整し、透明感のある色面を作ることが多いです。

グラデーションや色の重なりによる深みが、作品の静謐さにつながっています。

### ⑤ 小さくて静かな世界観

技法そのものだけでなく、「静けさ」「均衡」「余白」を大切にされた構成が特徴です。

版画でありながら、絵画的・建築的な空気感を持つ作品が多いです。

### まとめ

橋本さんの版画は、シルクスクリーンを用いた多層の色面構成と、精密な幾何学的デザインが大きな特徴です。一見シンプルに見える作品でも、実際には非常に手間と時間をかけた緻密な制作プロセスを経ています。

## 2. 橋本さんの前職である「大工経験」と「版画」の関係性

### ① 構造物としての画面づくり

大工仕事は、

寸法

精密な計測

図面に基づく構造設計

が不可欠です。

橋本さんの版画は、まさに構造物のように組み立てられた画面が特徴です。

## ② 幾何学的な形態

正確な位置合わせ

計算された余白

レイヤーの積層構造

これらは、建築や木工の「構築的な思考」と非常に相性が良いです。

## ③ 図面のような思考プロセス

アトリエに図面が残されているという点はとても象徴的で、橋本さんが作品を「設計」するように構想していたことを示唆します。

作品の構成を図面のように計画する

版の位置や重なりをミリ単位で調整する

色面の配置を建築的に考える

こうしたプロセスは、まさに大工の仕事で培われる図面的思考そのものです。

## ④ 精密さと職人的な姿勢

大工仕事は「誤差を許さない精度」が求められます。

橋本さんの版画も同じで、見当合わせ(版の位置合わせ)は極めて精密です。

1ミリのズレが画面全体の印象を変える

何十版も重ねる緻密な作業は、手作業でありながら機械的な精度を追求する

これは、職人としての身体感覚がそのまま版画制作に生きていけると言えます。

## ⑤ 小さな美学と建築的空間感覚

橋本さんの作品には、「静けさ」「均衡」「余白」「構造」といった建築的な美意識が強く感じられます。

大工として空間を扱ってきた経験が、

画面の“空気感”

形と形の“間”

緊張感のある構成

に反映されていると考えられます。

## まとめ

橋本昌巳さんの前職である大工の経験は、版画作品の構造的・精密さ・設計的思考に深く結びついていると言えます。残された図面は、彼が作品を「設計図のように構築していた」ことの象徴であり、その制作姿勢は大工としてのバックグラウンドと強く響き合っています。

## 3. 大工経験と「重力・無重力・空間」というテーマの関係

### ① 建築は常に「重力」と向き合う仕事

大工の仕事は、

柱が荷重をどう受けるか

梁がどれだけの重さに耐えるか

建物全体のバランス

といった重力との対話が本質です。

橋本さんが作品に「重力」「無重力」を用いるのは、構造物を扱ってきた身体感覚が、抽象的なテーマとして普遍的・抽象的されたと考え、とても自然です。

## ② 図面的思考＝“空間”を平面に落とし込む作業

図面は、三次元の空間を二次元に翻訳する作業であり、版画の構成と非常に似ています。

平面の中に奥行きを感じさせる

形と形の“間”で空間をつくる

緊張感のあるバランスを保つ

橋本さんの作品に漂う静謐な「空間性」は、

図面を引くような空間把握能力が背景にあると考えられます。

## ③ 「無重力」は構造物からの解放としての抽象表現

大工としての経験は、常に“重力に従う”世界です。

しかし、抽象画・版画の世界では、

形が浮遊する

上下が曖昧になる

重さのない構造が成立する

つまり、現実の制約から解放された空間を作ることができます。

橋本さんが「無重力」という言葉を使うのは、現実の建築では不可能な“自由な構造”を追求した結果とも言えます。

## ④ 作品の幾何学性＝建築的構造の抽象化

橋本さんの作品は、

直線

円

面の重なり

精密な配置

といった、建築図面のような要素が多く見られます。

これらは、建築の構造要素を抽象化したものと捉えると、タイトルの意味がより深く理解できます。

## まとめ

橋本さんの作品に登場する「重力」「無重力」「空間」という言葉は、前職である大工の経験と密接に結びついています。

建築で向き合う“重力”

図面で扱う“空間”

抽象表現で可能になる“無重力”

これらが、橋本さんの作品世界の核となっていると考えられます。